

# 清末『新小説』誌における『洪水禍』 ——明治政治小説『経国美談』からの受容を中心に

寇 振 鋒

## 1. はじめに

『洪水禍』(以下『洪水禍』と略す)は清末『新小説』誌に掲載された初めての小説である。『新小説』は日本で創刊され、「中国唯一之文学報」<sup>1</sup>と揚言された。この小説は「小説界革命」の宣言書としての「小説と群治の関係を論ず」<sup>2</sup>のすぐ後に、また『新小説』の主宰者梁啓超の自ら創作した政治小説『新中国未来記』と羽衣女士著の『東欧女豪傑』の前に、置かれている。梁啓超によれば、『新小説』の創刊は政治小説『新中国未来記』を載せるためという<sup>3</sup>。こうしたことから、小説『洪水禍』は『新小説』中で重要な位置を占めていることが、十分想像できよう。主宰者梁啓超にとって、『洪水禍』は『新小説』において一つの看板小説として存在したのであろう。換言すれば、梁啓超は『洪水禍』に大きな期待を寄せていたと思われる。

『洪水禍』は『新小説』第一号(1902.11)と第七号(1903.9)にそれぞれ三回と二回分が掲載され、計五回で中断した。阿英はこの小説について、次のように指摘している。

国外に取材したもので、最も主要な著作は、雨塵子の〈洪水禍〉(『新小説』)があり、フランス革命を描いて六回書かれたが、中断した。専制政治反対の作品で、文章もなかなか美しい。(中略) 〈洪水禍〉〈経国美談〉および〈泰西歴史演義〉が比較的優秀である<sup>4</sup>。

『洪水禍』は阿英に高く評価されている。また、ここで漢訳本『経国美談』も評価されている。『洪水禍』の角書は、「歴史小説」である。しかし「政治小説の本拠地」<sup>5</sup>としての初期『新小説』誌所載の『洪水禍』において、作者の専制反対の穏健的政治思想は十分見てとれる。そのため、本稿ではこの小説を『経国美談』と同じく歴史的な政治小説として扱う<sup>6</sup>。

また、この小説は明治の政治小説『経国美談』の影響を受けて創作している。というのは、『洪水禍』には、『経国美談』の影響の跡をありありと窺うことができるからである。そのため、中国最初の近代的小説雑誌『新小説』における初めての小説として、この小説の性格、由来を明らかにする必要がある。この小説についての目録や梗概はかなり収録されているが、しかし先行研究は多いとは言えない。とくに、この受容関係について、先行研究は触れていない。そのため、本稿は同じく歴史的な政治小説としての『洪水禍』と『経国美談』との比較を通して、その受容の一端を考察しようと思う。

## 2. 『洪水禍』と『経国美談』の梗概

『新小説』は1902年11月14日に横浜で創刊された。それに先立ち、「新小説報社」と署名された「中国唯一之文学報<新小説>」の文章中で、創作予定の『洪水禍』の内容が次のように予告され、概括されている。

この書は即ち仏国大革命の演義である。昔、仏王ルイ十四世には、<朕の死後に大洪水が来るであろう>との臨終の遺言があった。そこでこれを書名とする。この書は初めに、革命前の、太平の世の歌舞のありさま、贅沢三味の光景、及び当時の官吏貴族らの横暴、世間風俗の腐敗を述べる。次に、革命時代の空前絶後の惨劇を述べ、人を恐怖に陥れる。最後に、ナポレオンの、天地を揺り動かす覇業によって終わる。書中には極分りやすい書き方で、ルソー、モンテスキュー等哲人の学理を明らかにし、とりわけ人を深く考えさせる。

残念ながら『洪水禍』は、五回だけで中断し、未完の小説となった。書き終えられた五回分の梗概は次の如くである。

在位七十四年のルイ十四世は、ある日、ふと仮眠したときに、フランス全土が洪水によって氾濫する夢を見た。ルイ十四世時代に、宗教の自由を主張したプロテスタントは国外に追放された。スイス出身のネッケルという、大志を抱き、謀略に富み、経済財政学に通じる人が、ルイ十五世によってスイスの駐仏公使となった。ルイ十六世が即位してから、国家財政の破綻が一段と深刻になり、総理大臣モールパは、財政の破綻を救うために、異教徒のネッケルを財務大臣に招こうとしたが、ネッケルに断られた。財務大臣のチュルゴーは経済学に通じており、ルソーの理想を信奉するため、理想主義的な改革を断行しよう

とした。しかし結局、平民と貴族の恨みを買って、失脚した。

アメリカが1776年に英国から独立した。このニュースはパリ市中で騒がれた。ネッケルは辞職した財務大臣と交替した。パリ市中の有力な紳士たちは、平民の代議士が必要であり、さもなければ、納税に応じないと主張した。フランクリンが、対英独立戦争への援助を求めるために、アメリカの公使として来仏する。市民は、フランクリンを自由の使者として熱狂的に歓迎する。ルイ十六世はアメリカの援助の申し入れを引き受けたが、しかしネッケルは財政難の理由で強く反対する。そこで、フランクリンはあらゆる市民の歓迎会に出席して、援助を訴えようとする。

パリの歓迎会で「天賦の自由」と、援助を求める演説を行う。ある市民が、アメリカへの援助の請願行動を行おうと主張したが、しかしミラボーはその軽率妄動を戒める。これに対し、フランクリンは感銘を受ける。フランスが援助に乗り出す。しかし、フランスの財政は日々に困難になって、モールパが辞職する。そして驚天動地の大挙動が出来る。

上の創作予定の梗概と比較すると、この書き終わった五回分は、ただ最初の革命前の光景だけである。それ以後は続けられていない。

『経国美談』は前篇（二十回 1883.3）と後篇（二十五回 1884.2）に分けられている。作者矢野龍溪は改進黨の重要な組織者、花形政治家である。清国駐在の全権公使を務めた際に、かつて梁啓超との付き合いもあった<sup>9</sup>。『経国美談』は、日本政治小説の先駆的作品であり、当時の民権青年たちに熱心に支持されたベストセラーであった<sup>10</sup>。内容を要約してみると、前篇では、希臘の小国齊武<sup>セーベ</sup>では、民政党と専制党の内部抗争が起っていた。斯波多<sup>スベト</sup>の後援を得た奸党が國政を一手に握るところから物語が始まる。「仁」を代表する威波能<sup>イボネ</sup>は公会堂に正論して奸党に捕らえられた。「智」を代表する巴比陀<sup>ヘビデス</sup>、「勇」を代表する瑪留<sup>メルロー</sup>等諸名士は、阿善<sup>アーゼン</sup>へ亡命した。巴比陀は阿善の公会堂で雄弁を振り、援兵を乞う。民政の回復のため、奇計をもって、巴比陀等志士十二人は女装して、奸党を倒し、民主政治を回復する。

後篇では、齊武は斯波多の攻撃に応じ、阿善と連盟しようとする。しかし阿善ではあいにく平邪<sup>ヘージュラス</sup>の乱が起り、純正党が迫害を受けた。秩序を回復した阿善と結んだが、また、軍備負担の意見の違いで、阿善との同盟が破れた。阿善は斯波多と手を握る。齊武と同盟国は斯波多同盟軍の第四回の征伐を打ち破って、國威を発揚する。ついに、齊武は希臘の覇権を握って大団円となる。

『経国美談』は、政治小説としてそのまま漢訳され、梁啓超の主宰する『清議報』第36冊（1900.2）～第69冊（1901.1）（第52、53、66冊を除く）に連載された。しかも『経国美談』の漢訳の前後において、梁啓超はこれを高く評価していた<sup>11</sup>。

### 3. 『洪水禍』における『経国美談』の受容

まず『洪水禍』の著者と『経国美談』との関わりから見ていこう。『洪水禍』の著者は、「雨塵子」と署名されている。「雨塵子」はまた『経国美談』の漢訳者周遼しゅうりょうの号である。そこで、『洪水禍』の作者雨塵子と『経国美談』の漢訳者周遼は同一人物だとみなすことができる<sup>12</sup>。

周遼（1878-?）の別名は宏業、号は伯勳、雨塵子で、湖南の生まれである。周遼は梁啓超の湖南時務学堂時期の学生であった。彼は、学堂中の優等生であった。戊戌政変後、康有為、梁啓超が日本に亡命し、時務学堂も閉鎖された。周遼も転々として日本に亡命し、先生梁啓超の所へ身を寄せる。しかも、梁啓超によって設立された東京高等大同学校にて学習する。かくして周遼と明治政治小説『経国美談』との深い縁が結ばれていった。

周遼は明治政治小説に夢中になった先生梁啓超と同じく、翻訳から創作へと転向し、自ら筆をとって小説を書こうと志し、自らの政治信念を作中に披瀝しようとした、と推測される<sup>13</sup>。

明治政治小説代表作としての『経国美談』は初めて周遼によって翻訳され、初めて中国に導入された。その上に、『洪水禍』もまた、周遼によって創作された。両作品が同一人物の手によるからこそ、両者の間の受容の可能性が最も高いと考えられる。

次に、両作品におけるいくつかの類似点から、『洪水禍』が『経国美談』を下敷きに書かれたことを論証していく。

#### 3・1 まくらにおける類似

『経国美談』の第一回は、齊武の一老教師が阿善コドリユスの格 徳王と士良武スラスズリュスという二人の賢王義士の事跡を、少年時代の主人公巴比陀、威波能、瑪留に紹介する。そこで、少年たちは功績を立てる夢を抱くようになる。この三少年が後に齊武の民政回復の中心的人物となった。『経国美談』は老教師の話を通して、齊武の民政回復の成功が、前もって示されている。

而シテ此ノ一回ノ譚ハ、紀元前三百九十四年頃ノ事ニシテ、今ヤセーベノ国勢ヲ興隆シ、之ヲシテ希臘列国盟主ノ地位ニ、立タシメンガ為メニ、天更ニ、一群ノ童子ヲ降シテ、済民ノ大業ヲ成サシム。此ノ童子等ガ国ニ立ツルノ、功業如何ハ、後回ヲ読デ、之ヲ知レ。

『洪水禍』の第一回は、ルイ十四世が、ある日、ふと仮眠したときに、後患を絶つことを商議する大会に出る夢を見た。そしてついにフランス全土が洪水によって襲われた、という夢から醒める。大洪水は、フランス革命の前触れとなり、フランス革命の到来が前もって示されている。

この段の話は、本書の初めで、まくらと成した。但し、この話は仏国の史書に明文がなく、嘘か実話か臆測するよしもない。しかしこのことには、重要性があり、荘嚴な国家を騒乱の地に変わらせ、国王子孫を断頭の鬼に成らせるのである。書中の事実を問うならば、次回の詳細な叙述に従え。

両小説は、ともに第一回をまくらにして、将来のことを前もって示している。また、ともに歴史物語を通して現実政治と歴史の関係を描く動機を表現している。漢訳『経国美談』が「いわば章回小説の本家への逆輸出となっているのである」<sup>11</sup>以上は、それでは、政治小説の角度から見れば、『洪水禍』のまくらも同じく周達によって逆輸入されたのであると考えられよう。さらに、政治小説にまくらを置くのは、『経国美談』からの啓発だと言えよう。

### 3.2 夢の描写における類似

『経国美談』後編の第十六回には、巴比陀が夢を見るプロットが書かれている。

スパルタが四度目の齊武を征伐する大戦前に、巴比陀は一人の老翁から、「請フ、栗色ノ毛アル、処女ヲ犠牲トシテ、我々ヲ祭レ。此ノ戦必ズ、勝タン。將軍夫レ、疑フコト勿レ」という奇計を教えられた。

ペロピダスハ益々之ヲ怪ミ、其ノ何人ナルヤヲ、問ハントスルトキ、一陣ノ凄風忽チ颯ト吹き来リ、寒気皮膚ヲ刺スト覺ヘシガ、フト雙眼ヲ開ケバ、之レナム一場夢ニシテ、身ハ副総督ノ陣中ニ在テ、手ニホーマーノ古詩卷ヲ持

チナガラ、假寝シテゾ居タリケル。

その後、「ペロピダスハ夢中ノ事ノ、何トナク心頭ニ關シ、夜ノ明ルヲゾ待チニケル。」とし、翌日、巴比陀はこの夢を諸將に、「某コソハ昨夜、奇異ナル夢ヲ見タレ。是レモ全ク明日ノ大戦ニ、心ヲ勞スルノ、疲レシ故カトハ、思ハルレド、試ニ之ヲ諸君ニ語ラン」と、夢のことを一々話していく。

前に述べたように、『洪水禍』のまくらにも、夢が書かれている。

ある日、政務の間に、ルイ十四世が仮寝した時、急に、フランス王宮に似ているような似ていないようなところに来た。欧州各国の君主がみんな来ている。なんとみんなが、後患を絶つことを商議する会議に出席しているのである。各国の君主がルイ十四世の専制手段を咎める。ある人は、平民が騒動を起こす主な原因は「民気」であると、主張した。しかしルイ十四世はそれがどうしても君主の勢力に勝らないと信じている。その後、洪水がフランスの全土に氾濫する。

ルイ十四世は洪水に「吃驚して急に目が醒めた。なんと先ほど見たのは、夢であった。＜この夢は、いささか奇妙だ。恐らく吉兆ではない。ひとまず隠して他人に言わないでおこう＞、と心中黙々として言った。一人で心中において子細に推測して、やがていくらか納得がいった。数日後、朝廷の会議の時にこの夢を諸大臣、貴族たちに話した」。

このように、両小説には、同じく奇怪な夢を見るプロットがある。『経国美談』は、スパルタ兵に殺された冤鬼が巴比陀の夢に現れて、これは縁起の良い夢である。『洪水禍』は、氾濫している洪水がルイ十四世の夢に現れて、縁起の悪い夢となる。二つの夢の吉凶は正反対であるが、しかし両小説はともに仮寝した時に奇怪な、運命的な夢を見る。当事者ともに奇怪だと思い、その後は、夢のことをみんなに一々話す。この一連の描写は、かなり似通っているとさえよう。

清末の政治小説のまくらは、よく夢を媒介として、小説の啓蒙の主題的思想を紹介する<sup>18)</sup>。そのため、『洪水禍』は、恐らく同類の政治小説の嚆矢と言える。さらに、このような夢は『経国美談』からの受容と思われる。

### 3.3 小説の本文に入る段階における類似

両小説は共に、第一回のまくらが終わってから、第二回目で旧来の政治状況を紹介する。『洪水禍』の第二回目は、「今、この驚天動地の大事業を述べるには、先ず四族の起源及びその関係勢力の消長を説明する」とし、フランスの旧

来の政治状況を紹介する。『経国美談』の第二回目は、「第三回以下ニ説キ起ス物語リハ紀元前三百八十二年ニ、其ノ端緒ヲ発シタルモノナリ。今第三回ニ説キ入ルノ前ニ於テ、先ヅ希臘列国当時ノ、状勢ヲ畧説スベシ」とし、阿善、斯波多、齊武三国の政治状況を紹介する。このように、両小説はこの段階で似通っている。ただ、『洪水禍』は第二回目で政治状況を紹介してから、直ちに小説の本文に入る。これに反して、『経国美談』は第二回目で小説の本文に入っておらず、第三回目から小説の本文に入る。この違いは周達自身の漢訳の『経国美談』と無関係ではない。

『経国美談』の漢訳の時、原作第二回「希臘列国の形勢」は、漢訳第二回の前半に組替えられ、原作第三回前半と組み合わせて、漢訳本の第二回となった。組替えの理由は、恐らく原作の第二回目が、ただ政治状況の紹介だけなので、小説性に欠けていると判断したのであろう。そのため、周達は自身で小説を創作する時には、その欠陥を補おうとしたと思われる。かくして彼自身の『洪水禍』は、自身漢訳の『経国美談』と一致する。『洪水禍』の第二回の形式は『経国美談』から模倣し、またその欠陥を補う工夫がなされていると言える。

### 3.4 出典明示及び史実と虚構の結びつけにおける類似

両作品は同じく外国の題材を借りて小説の舞台にしており、ともに出典を明示している。

『経国美談』前編の「齊武名士経国美談引用書目」に八冊の引用書目が並べられている。

- 具朗社 (George Grote) 氏著希臘史／千八百六十九年出版 十二冊
- 慈兒禮 (John Gillies) 氏著希臘史／千八百二十年出版 八冊
- 志耳和兒 (Connop Thirlwall) 氏著希臘史／千八百三十五年出版 八冊
- 格具 (George W. Cox) 氏著希臘及ビ羅馬ノ古代／千八百七十六年出版 一冊
- 須密 (William Smith) 氏著希臘史／千八百七十年出版 一冊
- 防是新 (Bojesen) 氏著希臘史／千八百七十一年出版 一冊
- 遇杜律 (Goodrich) 氏著希臘史／千八百七十七年出版 一冊
- 知杜禮 (Tytlers) 氏著萬国史／千八百六十八年出版 一冊

『経国美談』後編の「凡例」には、以上の八冊以外、セノホン、プリュータ

一チ二人の遺書もある。作中の注記は、セノホンは「勢氏」と略し、プリューターチは「費氏」と略されている。なお、この「二書ノ外ナル史冊ハ、多ク学校用ノモノニ過ギザレバ、本篇ニハ別ニ其ノ引用書目ヲ掲記セズ」という明記しない書目もあることが示されている。

前編「凡例」第三条では、「且ツ是書ノ全ク正史ニ據ルヲ知ラシメンガ為ニ、正史中ノ実事ニハ、一々符号ヲ付シテ之ヲ表示セリ。即チ注ニ（イ或ハロノ一節ハ某氏ノ希臘史）トアルハ、イ或ハロノ假字ヲ以テ前後ヲ挿ム間ノ事柄ハ、正史ナルヲ示スモノナリ。ハニホ等ノ假字ヲ以テ挿ムモノモ、亦タ同ジ。又（以上一節ハ某氏ノ某史）トアルハ、其全節ノ正史ナルヲ示ス。又（何々ノ事ハ某氏ノ某史）トアルハ、其ノ一事ノ正史ナルヲ示スモノナリ。」と、読者に前もって説明する。

この引用書目は、『経国美談』の作中にも次のように詳細に明示している。例えば、第一回の最後には、「(以上諸名士ノ功績、及ビ其姓名等ハ、慈氏、具氏ノ希史ニ據ル。）」、第二回の作中には、「(以下列国ノ形勢及ビ、セーベノ国情ハ、具氏、遇氏ノ希臘史ニ據ルモノナリ。）」、「(奸党ノ姓名ハ、具氏ノ希臘史ニ據ル。）」、「(イノ一節ハ、具氏ノ希臘史。）」、第三回の作中には、「(イノ一節ハ、具氏ノ希臘史。）」、「ロイノ一節ハ、具氏ノ希臘史。」、「(ハノ一節ハ、慈氏ノ希臘史。）」などの出典が明確に指摘してある<sup>16</sup>。ただ、周達は『経国美談』の漢訳時に「凡例」や作中の出典明示などをすべて省略した。しかしこの頻繁に出ていた出典明示は、周達にとってどうしても看過できなかったと思われる。

『洪水禍』の出典明示の位置は、『経国美談』と異なり、作中につけず、各回の末尾の「付記」としてあり、出典が附加されている<sup>17</sup>。

例えば、第一回の「付記」は、歴史事実を指摘してから、「この回以後は毎回において正史事実を付記する」と約束する。第二回の「付記」には、「国王、貴族、教徒、平民の四族の状況は、各家の『仏国革命史』に拠る。ネッケルの生年、出身、履歴は、羽化生の『ネッケル小伝』に拠る。仏国の財政困難は、大乱の本源であり、当時の実事である。ネッケルは財務管理に長けているという名声があり、且つ人民を重視したのは、実事である」、と示す。

第三回には史実の附記がないが、第四回の付記に補われている。「モールパはネッケルを強く推薦しようとするが、外国人で、新教徒のために、直接に財務大臣に採用するのに不適當であるため、取りあえず一官職の会計総督を設立



して取り扱う。これは『法国革命史』に拠る。チュルゴーの政見と辞職の理由は、**「実事である」**、と示す。

『洪水禍』の第五回までの引用書目は、羽化生『列格耳小伝』、ミニエー『仏国革命史』及び各家の『仏国革命史』である。

中国には、出典を羅列した歴史書、歴史小説には、正史『三国志』、小説『東周列国志』などがある。「中国唯一之文学報<新小説>」において、『洪水禍』の概要を紹介する直前に、正史『三国志』に対して次のように否定的である。

「蓋し正史を読むと飽き易くなる。演義を読むと感動し易くなる。諸版本の陳寿著『三国志』と街の至る所で流行している『三国演義』を証として、その比較は、はっきりしている。故に当雑誌社の同志がいつそう精力を演義に注ぎ、雄大奇異である筆法にて、嚴肅典雅で重々しい文章に取って代る」<sup>18</sup>。これで分かるように、陳寿著の史実に基づく正史『三国志』は、人口に膾炙する羅貫中著の『三国志演義』に比べられない。ただ、羅貫中著の『三国志演義』には出典明示がない。一方、小説『東周列国志』は、歴史事実が「全書の如何なることでも、何時でも、抜き書きされ、配列されているので、創意、工夫が全然ない」<sup>19</sup>のである。したがって、このような史実明記の小説は、文章が無味乾燥で、小説性に欠けているとされる。ここから分かるように、『洪水禍』中の歴史事実の明示は、中国の歴史書、歴史小説を手本にせず、むしろ『経国美談』の烙印が深く押されていると言えよう。

次に史実と虚構の結びつけ方について述べよう。

『経国美談』の出典明示の目的は、「凡例」によると、「読者ヲシテ小説ヲ読ムノ愉快ヲ得ルト同時ニ、正史ヲ読ムノ功能ヲ得セシメ」というものである。そのため、矢野龍溪は、作中の事件の一々にほとんど注記をつけて、この物語は、架空のことでない、事実であることを強調する。なお、作中に注記のない箇所は出典がなく、従って虚構のものであることを示す。要するに、歴史事実と虚構はともに示されている。

『洪水禍』でも、歴史事実と虚構が同じくともに示されている。

各回末尾の「付記」には事実と虚構が明示され、作中にも虚構であることが示されている。

末尾「付記」中の虚構明示は、例えば、第一回に、「ルイ十四世が、死後に洪水が来ると言ったのは、今わの事である。フロンドの乱はルイ十四世の幼時の事である。」とする。第四回に、「米国が独立を宣言したのは、1776年であり、

ネッケル内閣は、この年に成立したが、仏国が米国の独立を承認したのは、1783年であり、ネッケルの辞職以後である。」とする。第五回に、「フランクリンが来仏した時は、ミラボーはまだ普国にいる。」とする。各回の「付記」に本当の事実を示すと同時に、作中のことが虚構であったことを明示している。

作中の虚構明示は、例えば、第一回に、「この話は仏国の史書に明文がなく、嘘か実話か臆測するよしもない。しかしこのことは、重要性があり、荘厳な国家を騒乱の地に変わらせ、国王子孫を断頭の鬼に成らせるのである。」とする。第四回に、「この三人の姓名は史書に見えないから、作り出すべきがない。故に欠如のままにする。但し読者の皆さん、覚えていてください。この人たちはみんな、パリの紳士であり、市民の中では最も権力のあるものである。」との明示がある。

『経国美談』の「凡例」は漢訳時に省略されたが、しかし「正史を読むの功能」と「小説を読むの愉快」という出典明示の目的は、周達にとって看過できなかったのであろう。出典明示の位置が異なるが、しかし作者の目的は同じである。すなわち『洪水禍』は『経国美談』と同じく、出典明示及び史実と虚構の関係を明らかにしている。そのため、周達が『経国美談』における史実と虚構の関係を十分理解したうえで、『洪水禍』を創作したと考えられよう。

### 3.5 友人の偶然出会い及び談話における類似

『経国美談』前篇第五回、齊武は奸党のクーデターによって、志士<sup>シロウキ</sup>巴比陀が阿善に亡命して、「扱テ何レノ処ニカ宿ラント、街上ヲ歩行シケルトキ、思ヒモ懸ケヌ後ロヨリ、遥ニ我ガ名ヲ、呼ブ者アリ。ペロピダスハ振り顧テ、之ヲ見ルニ、何ゾ図ラン、是ノ人ハ、我ガ正党中ノ重モナル一人、アンドロクリダスニテアリケレバ」と、安度具<sup>アンドウキ</sup>に偶然に出会った。安度具は巴比陀より二日間早めに来たので、巴比陀に阿善の人民参政の状況を話す。

作者は自ら叙述しなくて、第三者の口を語り手として、阿善の人民の参政状況を紹介する。

『洪水禍』も同じように第三者の語り手を利用している。

『洪水禍』の第四回に、パリ市中の十字路に、「二人の紳士がいた。一人はあちらから来て、一人はこちらから行く。こちらの紳士は楽しそうに走って、周りを注意する暇もなく、あちらの紳士とぶつかった。あちらの紳士を危うく転ばせるところであった。その人は、<誰がこんなに無鉄砲なんだ>と、びっくりして言う。こちらの紳士が頭をもたげて見ると、なんと親密な友人であつ

た」として、偶然の出会いを述べる。その後、二人が、アメリカ独立や自由のことを論じ、フランス政府への不満を語っているときに、「突然、後ろから、<王威国法のもとで、ここでこんな不満を言っているのか。どこの大胆なやつだ>、と大声で怒鳴る者がいた。二人の紳士は吃驚し、振り返って見ると、なんともう一人の旧友であった」とし、また偶然に出会ったことを言う。そして、三人はフランスの財政問題や自由の問題やフランクリンの来仏や歓迎会準備などを話し合う。小説は友人の邂逅と談話によって、フランスの財政状況、フランス人の自由に対する切望を紹介する。

両作品はともに友人が街頭で邂逅し、政治状況などについて語り論じる。言い換えれば、第三者の口を語り手として当時の状況を紹介する。比較してみると、『洪水禍』の友人の邂逅、談話は、より滑稽になっている。そしてこの手法は、『経国美談』からの受容の可能性が高いと考えられよう。

### 3.6 援助を求めるための演説及びその場面描写における類似

両作品における演説の目的は、同じく援助を求めるためである。そこで、先に敵国との恨みや敵国の横暴や潜在的危機をあばき出すことになる。いわば両者は同じく離間策をとる。

『経国美談』前篇第五回、巴比陀が安度具の阿善に関する紹介を聞いてから、「是ノ大会コソアゼン人民ニ、心事ヲ訴ルノ好時機ナレトテ、ペロピダスハンドロクリダスニ、其ノ意中ヲ物語リ、此日開会ノ時刻ヲ量リテ、兩人與ニ大会堂ニ赴ク」こととなった。

前篇第六回は、巴比陀の壇上での演説が次のように詳しく書かれている。

熱心、国ヲ愛スルノ、会民諸君ニ問ハン。当国ノ英雄、セミストクレスガ経営シタル、此ノアゼンノ堅固ナル堞壁及ピアゼントビーリウトヲ連結セル、長壁ヲ毀ツテ、之ヲ修築スルコトヲ、禁ジタルハ、何レノ国ナルヤ。(会民叫ンデ曰ク、『スパルタナリ、スパルタナリ。』) 又民政ヲ以テ、列国ニ模範タル、当国アゼンノ内政ニ干渉シ、其ノ憲法ヲ自由ニ制度改正スルヲ、禁ゼシハ何レノ国ナルヤ。(会民叫ンデ曰ク、『スパルタナリ、スパルタナリ。』) 又地中海中ニ星羅セシ、当国アゼンノ属地ヲ、悉皆棄捨セシメシハ、何レノ国ナリヤ。(会民絶叫シテ、『スパルタ、スパルタナリ。此恨ミ、忘ル可ラズ。』ト叫ブ。) 当国ニ向ツテ、是等ノ侮辱ヲ、加ヘシ者ハ、スパルタナリ。然ラバ

即ち、スパルタハアゼンノ、国讐ニアラズヤ。然ルニアゼンノ国讐タル、スパルタハ、今又吞噬ヲ逞フシテ、弊邦セーベノ、内政ニ干涉シ、奸党ヲ助ケテ、我ガ自由ノ政体ヲ顛覆シ、彼ガ嘗て当国、アゼンニ加ヘタル、無礼ヲ以テ、今日又之ヲ、我ガセーベニ加ヘタリ。然ラバ即チ、アゼン旧来ノ国讐ハ、今日又セーベノ国讐ナリ。諸君ハ我ト其ノ国讐ヲ、同クスル者ニアラズヤ。

(此時会民ハ、頻ニ然リ然リト叫ブ。略。)今スパルタヲシテ、遂ニセーベヲ吞併セシメバ、アゼン豈能ク、獨リ全キコトヲ得ンヤ。今日アゼンナクンバ、明日セーベ亡ゼン。今日セーベナクンバ、明日アゼン亡ビシ。然ラバ即チ、我ガセーベ、今日ノ国讐ハ特リ、セーベノ国讐ニアラズ、蓋シ又アゼンノ国難ナリ。願クハ諸君ガゼーベノ回復ニ、一臂ノ力ヲ、假サレンコトヲ。

そして、巴比陀は引き続き、「今若シ当国ヨリ、五千若クハ、六千ノ兵ヲ発シテ、我ガ疆土ニ臨マシメバ、我ガ国ノ有志者、必ズ義兵ヲ挙ゲテ、内ヨリ応ズル者アラン。(中略)今日弊邦ノ存亡ハ、唯当国ノ人民諸君ノ、意中ニ在ルノミ。」(此時会民ハ皆ナ絶叫シテ『援フ可シ。』『助ケズンバ、アルベカラズ。』ト喝采セリ。)と、援助を求め、しかも会民からの支持を得ることができる。巴比陀演説後、阿善の多くの人々の中で、強い反響を巻き起こすようになる。散会后、会民たちはみんな巴比陀に好感を持ち、斉武の不幸を哀れむ。阿善の民政党の阿慈頓アリストジーンという人は、巴比陀の寓舎を訪れて、阿善政府の内情を語る。巴比陀にとって、得がたい助力である。

『洪水禍』第四回、第五回は、ほぼ同じような場面が描写されている。

フランクリンが援助を求めるための来仏前に、合衆国政府は討議のうえ、次のように考慮するようになる。

良く考えると、欧州各国は皆拱手傍観で、援助してくれる国がない。フランスだけは早くから我国に同情を示している。現在、この国の多くの人々は、我国で戦闘に協力している。その上に、フランスとイギリスは代々の敵であるから、フランスはこの機会を借りて報復を図ることも不可能ではない。私達はフランスに援助を求めなければならない。

かくしてフランクリンが公使に選ばれた。フランス到着後、ルイ十六世に援助を申し入れたが、財政難の理由で財務大臣のネッケルに反対される。「フラ

ンクリンはイギリスがどのように暴虐であり、フランスと代々の敵であることを言い出さざるをえなくなる。これによって人心を扇動する。これは確かに人々を感動させる。」と、第四回目でもって演説を要約している。

第五回には、演説が詳しく書かれている。沿途の各地は、フランクリン到来の歓迎会を行なう。パリ市民はフランクリンにアメリカのことを演説させる。フランクリンは、援兵の求めにより影響をはかるため、この機会を借りて、人心を激励する。アメリカ人の「自由になれなければ、死をも甘んじよう」というような、「天賦の自由」を講じる。フランクリンの演説は、「また、聴衆の羨ましくもあり、恥ずかしくも思う心を揺り動かした。拍手の音に呼び掛ける声が混じる。〈あなたたちのアメリカがこのようであるのに、われわれフランス人はどうするのか〉」と、市民の共鳴を呼び起こした。

フランクリンは引き続き、「あのイギリスは公義を知らず、かの海軍の力によって、われわれアメリカ州の権利を無視し、台無しにする。かの派兵は日に日に多くなる」と説く。この際に、フランクリンは思わず涙を流して、「われわれ植民地の前途はどうなるか分からない。イギリスの勢いから見れば、植民地としてのわが国を台無しにするだけではなく、各国の属領を台無しにしようとする。(中略)我がアメリカ州と心を合わせて協力してイギリス人を防ぎ止めるなら、われわれは、何より感激に堪えない。」と、イギリスの横暴や潜在的危機を暴いた上で、援助を求めた。

フランクリンの声がまだ終わらないうちに、聴衆は、「われわれフランスは、必ずや援助すべきだ」と、声をそろえて叫んだ。フランクリンは市民の強い支持を得ることができた。

このように、フランクリンの演説は市民の中で強い反響を巻き起こした。散会后、フランクリンが寓舎に戻ると、フランスの官僚たちが相次いで訪れた。財務大臣ネッケルまで訪れてきた。結局ネッケルは援助拒否を固持しなくなった。

以上から分かるように、両者は演説前の心理描写、会場の雰囲気描写、市民歓迎の描写、散会後の状況などが、かなり似ているというよりも、むしろ全く軌を一にするとさえ言えよう。このことから、『洪水禍』は明らかに『経国美談』を模倣していると判断する。

以上のように、両小説はともに演説を小説に取り入れる。この巴比陀の演説に対して、藤田鳴鶴の「巴氏演説、字々熱血、阿人感動」との尾評がある。周達はこの人心を感動させる、扇動性を持つ演説が気に入って、演説を同じく取り入

れたのであろう。演説を政治小説に取り入れるのは、明治政治小説の特徴である。そのため、また、清末政治小説『新中国未来記』『東欧女豪傑』も同じく演説を取り入れている。しかしこのような共通性をふまえたうえで、『洪水禍』中の演説は以上述べたように、『経国美談』からの受容とすることができよう。

### 3.7 登場人物のタイプにおける類似

『経国美談』は、智、仁、勇をそれぞれ代表する巴比陀、威波能、瑪留三人の主人公を設定している<sup>20</sup>。巴比陀の「智」は、援助を求める演説、暗殺の計画、用兵などのプロットに十分現れている。

『洪水禍』中のフランクリンの人物造型は、巴比陀と同じく、「智」の形象をとっている。前にすでに述べたように、フランクリンが演説を通して、市民たちに強く支持されたので、ネッケルは世論を勘案した結果、支持に転換した。フランクリンの演説する心理、扇動の描写及び援助の獲得は、巴比陀と同じく「智」の現れである。他方、フランクリンは仏人の狂熱を見ると、「我々合衆国でも数年前の民情はこれほど激高しなかった。恐らく仏国は数年も立たずに、我々よりさらに大きい事を起こしてしまうかもしれない。」「恐らく軽挙妄動を免れず、いい結果とならないであろう」との予測、及びミラボーの請願行動反対の話を聴いて、「仏国には結局このような人物がいるのか。決して軽視できるものではない」との分析などは、フランクリンの「智」の現れであろう。

他方、チュルゴーの人物造型は、『経国美談』中の平邪に似ている。

平邪は「政治上ノ仕組ヲ發明スルニハ、特ニ鋭敏ノオアレトモ、其ノ目的トスル所ハ、現在社会ニ存スルノ、患害ヲ除クニアラズシテ、唯自家ノ胸中ニ、美麗ナル社会ノ雛形ヲ想像シ、其ノ一時ニ行ハレ難キニモ拘ラズ、此ノ美麗ナル雛形ノ如ク、現在ノ社会ヲ、改造更革セント欲スルニ在リ」（後編第二回）という人物である。彼のその理想的な「美麗ナル社会ノ雛形」はユートピアにすぎない。平邪は、「自由党には、ルソーの空想的政治論に心酔して、これをそのまま日本に実行することが民政の変革として理想的なものだと考えている人々」<sup>21</sup>の姿である。一時的に細民の機嫌を取ったが、この「平等邪道」<sup>22</sup>の空想は現実に合わなく、平邪の改革は成功できなかったばかりではなく、平民の恨みを買って、自身も暴民によって投獄された。

『洪水禍』中のチュルゴーも、「ルソー派の理想を持つ。財務大臣になってからフランスを大改革しようとする。およそ自分の理想に合わない習慣、旧例

は、すべて取り替える」(第三回)という理想主義的な改革者である。

チュルゴーはルソーの理想を信奉していたため、貴族や僧侶の特権を廃止し、彼らにも平民と同じく租税を負担させ、平民に参政権を与えるという理想的な改革を主張した。しかし、「フランスの人情は名士の理想と合わない。この改革はフランスを正さなかったばかりではなく、多くの騒乱を引き起こしてしまった」(第三回)。このように、「もっぱら自分一人だけの理想によるのでは、うまくいかない」(第三回)こととなった。

チュルゴーが新政を実施した年に、人民の生活はあいにく一段と困難になった。平民は、この恨みをチュルゴーの一人に集中した。このため、この改革を恨む人は貴族と僧侶だけではなく、平民まで服従しなくなってしまう。そこで数ヶ所で暴動が起きた。改革は人民のためだったのに、人民の恨みを買った。

平邪、チュルゴー二人はともに、理想と現実との矛盾を激化させた結果の犠牲者として書かれた。二人ともルソー式の思想に耽り、理想主義的な改革を断行しようとしたが、しかし失敗に終わったのみならず、自身にまで災いが及んだ。

『洪水禍』は『経国美談』の「書中ノ重モナル人物ノ姓名ハ、無論総テ正史ニ據レリ」と言うように、歴史上の人物の骨子に血肉をつける。ただ、この血肉は、『経国美談』から借用したものがあると言えよう。『経国美談』の人物造型に「支那臭がある」<sup>23</sup>、と指摘されている。そして五回までの『洪水禍』における主な登場人物の造型は、やはり『経国美談』中の登場人物をモデルとして模倣したように見える。

### 3.8 新演義体の歴史的政小説としての類似

『経国美談』は、歴史演義小説の形式に倣った「歴史的政小説」<sup>24</sup>である。しかも「政治史上の人物や事件を敷衍しながら、巧みにその時代の政治的興味に訴えようとした」「新演義体」<sup>25</sup>の政小説である。この二つの観点を合わせて、あえて言えば『経国美談』は演義体の歴史的政小説であろう。

したがって、「プロットに支那臭がある」<sup>26</sup>演義体の歴史的政小説『経国美談』は、周達にとって違和感のない外国小説である。しかも周達は、政治思想を歴史小説に融合させる「新演義体」に対して、親近感を抱いた。一方、『経国美談』の成功について、「この作品が大ベストセラーになったのは歴史小説としての面白さが大いに関係している」<sup>27</sup>と指摘された。このことに対して、周達も十分理解できたと思われる。それゆえ、周達は、日本式の「新演義体」

の歴史的な政治小説を借用して創作する決心を下したのであろう。

『洪水禍』の「歴史的」性格は角書「歴史小説」のとおり、明らかである。なお、「いっそう精力を演義に注いだ」「フランス大革命の演義」と指摘されたように、『洪水禍』は演義体を用いる。しかもこの演義体は『経国美談』のような政治思想を含む「新演義体」である。というのは、作者周遼はまぐらの冒頭で、「今日、私たちのような、西洋史を学んだことがある人は、その西洋の史書を読む時に、いくつかの新奇な感情が生ずるだろうと思う。」とし、小説を当時中国の現状に結び付けたからである。作者周遼が中国歴史を西洋歴史に比較するのは、西洋における専制反対の「政治的感情」を表現するためである。いわば、明治青年の海外に対する政治視野を拡大するための『経国美談』のように、『洪水禍』は中国人の政治的視野を広めるためである。そこで、作者は歴史事件の再生に虚構を加えて、自身の政治思想を作中に披瀝しようとした。

「政治小説の本拠地」における最初の小説『洪水禍』を政治小説として考えようとするならば、まず『新小説』の宗旨と離すことができない。『新小説』創刊前の予告「中国唯一之文学報<新小説>」の中で、「当報の宗旨は、もつぱら、小説家の言葉を借りて、国民の政治思想を呼び起こし、その愛國精神を励ますことにある。一切の淫猥鄙野の言葉、徳育に害するものは、必ず斥けられる。」<sup>28</sup>と主張された。そして、「新小説<第一号>」の中で、「今日、小説を提唱する目的は、必ず国民精神を奮い起こし、国民の智識を開化させなければならないことにある。これまでの誨盗誨淫の諸作とは比べられないのである。」<sup>29</sup>とし、あらためて小説創作における政治宣伝という目的が明らかにされている。さらに、小説界革命の宣言書「小説と群治の關係を論ず」の中で、「政治を新しくしたいなら、小説を新しくしなければならない」<sup>30</sup>、と同じく主張されている。

これらの主張は、『新小説』誌中の小説創作の最も重要な基準である。政治思想を含まない伝統的旧小説は排斥され、小説を政治と結びつけた小説、政治思想を含んでいる小説だけが、「新小説」と言える。小説は政治的啓蒙宣伝の一つの手段として考えられていた。こうしたことから、『新小説』の宗旨に沿った『洪水禍』は、政治小説として考えられよう。

なお、『洪水禍』を政治小説として考えれば、また小説中の政治思想と切り離せない。（『洪水禍』中の専制反対、天賦人權の政治思想は、後述に譲る。）角書から見れば、『新小説』において「歴史小説」と「政治小説」は別のジャンルであるが、しかし『洪水禍』は「至る所に寄託がある。すべては中国文明



の進歩を啓発するためである」ような自著作品である<sup>31</sup>。政治思想を託する『洪水禍』の創作目的は、政治的意味の吐露にある。そのため、『洪水禍』は純然たる歴史小説というだけではなく、政治色の濃い歴史的政治小説である。つまり、『新小説』の宗旨から見ても、政治思想から見ても、『洪水禍』は政治小説であり、さらに言えば、新演義体の歴史的政治小説であると言える。

一方、『新小説』の編纂において、「新小説の境地と旧小説の体裁が、往々にして相容れない。」<sup>32</sup>と指摘されたように、歴史的政治小説という新しい形式の模倣は、その難しさがあつたと思われる。したがって『洪水禍』は、章回体の歴史演義の「旧小説の体裁」に、政治思想を含む政治小説の「新小説の境地」を盛り込もうとした苦心の作であるのだろう。そしてそれが歴史的政治小説『経国美談』を模倣した点は、中国小説界中での新しい試みであると言えよう。

以上から見れば、この新演義体の政治的歴史小説としての『洪水禍』は『経国美談』を手本として書かれ、それなりの困難をもって書き上げられたと思われる。

### 3. 9 小説の大プロットにおける類似

『経国美談』の前篇の中心思想は、斉武の志士たちが国内専制に反抗し、志士救国の苦心を描いた民権思想である。後篇の中心思想は、斉武の国内統一から属邦との同盟、国威の海外拡張、ギリシア覇権の獲得を描いた国権思想である。小説の最後は斉武の覇業に終わる。斉武は、第四回のスパルタ及び同盟軍の征伐に勝って、名実ともにギリシア全土において覇権を握ることができた。小説の末尾に「セーベノ諸名士ガ、十九年間ニ於テ、内ハ奸党ヲ除キ、外ハ国勢ヲ伸張セル、経国ノ美談ヲ記シ来テ、筆ヲ此ノ最盛ノ年ニ止ム」、とされている。小説は斉武の最盛期を大団円として終わる。

『洪水禍』は同じく民権思想が描かれ、国権思想も書かれる予定であつたと思われる。『洪水禍』の前半の中心思想は、国内の専制反対を描いた民権思想である。一方、創作予定の梗概から見ると、小説は『経国美談』のように、「最後に、ナポレオンの、天地を揺り動かす覇業に終わる」、と予定していた。そのナポレオンの欧州統一の覇業は、まさに国権思想の現れであろう。

つまり、両作品はともに覇業の達成というハッピーエンドに終わる。いわば、両作品は同じく民権思想から国権思想への転換過程の描写であると言える。『洪水禍』の創作予定の梗概から見ると、『経国美談』を模倣しようとした跡が残されていると言えよう。

#### 4. 『洪水禍』における政治思想

『経国美談』においては、「ラディカルな暴力手段をあくまでも回避しようとする、穏健で微温な作者の党派的性格は随処に指摘することができる」<sup>33</sup>と指摘されたように、そこには改進黨の微温性、漸進性は、まぎれもなく現れている。

『洪水禍』には同じく穏健思想が存在する。『洪水禍』において、フランクリンの演説を聴いて感動した市民たちが、直ちに政府に対するアメリカへの援助の請願行動をとろうとする時、ミラボーによって阻止された。フランクリンは、「仏人のこのような熱意を見て、心中はとても喜んだが、恐らく軽挙妄動を免れず、いい結果とならないであろうと心配していた」。しかしミラボーの話を聴いて、「仏国には結局このような人物がいるのか。決して軽視できるものではない」と心中に感銘を受けた。

ミラボーは次のように穏健思想を主張している。

我々仏人のうまくできない原因を知るべきだ。アメリカ人はどんなことをしても紀律があり、どんなことでも後先のことを考える。しかも軽挙妄動をしない。だから、できたことは、いつも適宜であり、人を敬服させてやまない。我々仏人は内心で他人より蜂起が好きだが、しかし極めて落ち着きがない。あげくの果てには何の結果もない。これは我が国の人の生れつきの弱点である。どうしても正さなければならないのだ。例えば、今のこと、我々はこの熱意があるのなら、なんとかして、絶妙で安全な方法を考慮すべきだ。我々の政府を動かすためならば、ただ請願行動の手段だけを使って、どうしてよしいものか。もし政府が我々の言うことに従わなければ、どのようにしたらよいか。我々はまさか竜頭蛇尾のことをするまい。だから政府の出兵を求めるのはよしいが、しかし請願行動の手段を用いる必要はない。」(第四回)

フランクリンは、ミラボーの穏健な主張を聴いて大変敬服し、心中では再度賞賛した。ミラボーの主張及びフランクリンの感銘から見ると、作者周達が穏健思想に賛成していることが窺える。さらに周達の穏健思想を表しているのがこのプロットの虚構である。

小説の第四回には、フランクリンとミラボー二人が相次いで演説し、しかも二人でことばを交わしたプロットが書かれている。しかし実際は、これは全く

周達の虚構である。周達は、「フランクリンが来仏した時は、ミラボーはまだ普国にいる」（第四回「付記」）という事実によらず、わざわざフランクリンとミラボーの二人を会わせるプロットを描く。この虚構から見ると、周達がこの穩健思想を意図的に採用したと推測されよう。

残念ながら、『洪水禍』はここで中断した。しかし梗概から見れば、小説は国権思想と革命思想も書かれる予定であった、と思われる。というのは、創作予定の梗概はナポレオンの覇業の成功を小説の結尾とする。このことから見れば、作者は『経国美談』のように国権思想を書く予定があったと思われる。これは周達が結局国家の強大になることを願っていたからであろう。なお、革命思想も書かれる予定であったと思う。バスチーユ襲撃、ルイ十六世がギロチンにかけられたという事件も避けられないはずである。どう書くかが不明だが、しかし革命思想も潜在していると言えよう。

このような穩健思想と革命思想の同時存在は、初期『新小説』所載の政治小説の共通する特徴である。梁啓超の『新中国未来記』第三回において、黄克強、李去病二人が、革命と改良について勝負のつかない、激しい論争を行った。これは、革命と改良との間で揺れ動く彷徨期における梁啓超の心情の現れである。いわば、革命思想も改良思想も入り交じっている。虚無党小説『東欧女豪傑』には、「ストライキは、いつも労働者がひどい目に遇う」というストライキ反対の観点、及び「フランス革命の結果は、あまりにも恐ろしすぎる」というフランス革命を避けようとした観点が見られる。これらも『洪水禍』中の請願行動反対のように、穩健思想の流露であろう。『東欧女豪傑』には虚無党の思想がはっきり見られるとともに、穩健思想も見られる。したがってこの穩健思想、革命思想の同時存在は、むしろ初期『新小説』の寄稿者たちの彷徨する心理の現れであると言える。

次に小説中には専制反対の天賦人權の思想も存在する。

「天賦人權の観念は、初めて中国の小説の中で見られ、斬新な意義を有する」<sup>34</sup>、と指摘されたように、天賦人權の思想は、初期『新小説』における「新小説」の主要な特徴である。

『洪水禍』第四回、フランクリンは、「人間として世に生まれて、天賦の自由は自然に有する。この自由は自分でなくさないかぎり、たとえどんな暴君汚吏でも奪ってはならず、毛頭損ねることができないのである。」「自由になれば、死をも甘んじよう」、とする天賦人權の演説を行った。周達は、フ

ランクリンの口を借りて天賦人權の思想を強く打ち出した。『新中国未来記』第三回にも、同じく「自由になれなければ、死をも甘んじよう」が出ている。さらに『東欧女豪傑』第一回にも、「われ等の天賦の自由はすべて強く束縛されている」、とある。以上より、小説に天賦人權の思想を取り入れるのは、当時の思想的潮流であったことがうかがわれる<sup>35)</sup>。

『洪水禍』を含む『新小説』誌所載の「新小説」における天賦人權の思想は日本からの受容だと考えられる。日本の天賦人權の思想は明治時代初め以来ミル、モンテスキュー、ルソーらの考えにもとづいて、啓蒙思想、自由民権思想として主張されたものである。天賦人權思想は、日本自由民権論の政治思想の重要な構成要素である。

アメリカ独立当時の扇動雄弁家パトリック・ヘンリーは自由民権の志士に神様のように崇拝された。というのは、彼が、「吾に自由を与えよ、然らずんば死を与えよ」という言葉を打ち出したからである<sup>36)</sup>。この言葉は明治の自由民権運動家のスローガンとなり、大いに憂国の青年たちの血を沸かせた。これは日本亡命の梁啓超たちにとって看過できないことであつたと思われる。

天賦人權の思想の基礎としての『民約論』が中国に伝播したのは、日本のルソーと言われた中江兆民の漢訳『民約論』によるものであつた<sup>37)</sup>。このルソーの思想が日本滞在中の梁啓超、周達らへ影響を与えたことは十分考えられる。

日本亡命後、梁啓超は間もなく、自ら主宰する『清議報』第25冊から「飲冰室自由書」を連載し、その中でルソーの思想を打ち出している。とくに、その中の「破壊主義」において、次のように高く評価する。「欧州近世に国を医する名医は、数十家を下らない。私は、其の中の処方、今日の中国に最適なのが、ルソー先生の『民約論』のみであると見なす。この処方、前世紀及び今世紀の前半に、欧州全州に施して効があつた。明治六、七年より十五、十六年の間に、この処方を日本に施して効があつた」<sup>38)</sup>。その他、また文章を書いて、ルソーの天賦人權説を評価している<sup>39)</sup>。このルソーの思想は、『新小説』創刊の前に、よく梁啓超が論及していたものである。そのことから見れば、「新小説」へのルソーの影響が明治日本と切り離せないと推測できる。この影響の原動力は、やはりルソーの思想が、「日本に施して効があつた」からであろう。

日本では天賦人權論は、自由民権の運動を喚び起こすとともに、政治運動の重要な思想的武器となっていた。これについて、梁啓超、周達のような「新小説」作者たちは、深く受けとめたのであろう。言い換えると、藩閥専制政治に

反対する民権運動及び天賦人權思想が日本自由民権運動中で重要な役割を果たした。このことに対して、梁啓超、周達らは十分認識したうえで、専制反対の天賦人權の思想を自身の小説創作の中で生かそうとしたのであろう。

## 5. 未完の理由について

『経国美談』は完結した、大成功を収めた歴史的な政治小説である。残念ながら、『洪水禍』は遺憾にも未完に終わった。その理由について、次のような指摘がある。中村忠行は『東欧女豪傑』の未完理由を述べた際に、『洪水禍』の未完も同じく、「実は梁啓超の意見が、それぞれの作者を規制したからではないか」<sup>40</sup>、と指摘している。山田敬三も同じく『東欧女豪傑』と一緒に、「題材自体がすでに保皇派の思想に抵触するものだ」<sup>41</sup>、と述べている。歐陽健は、「恐らく作者の<落ち着きがない>ことと<輕挙妄動>とに賛成しない思想との関係であろう」<sup>42</sup>、と指摘している。

筆者もこれらの先行研究の説に賛成する。しかし『洪水禍』、『東欧女豪傑』だけではなく、『新中国未来記』もほぼ同時に中断した<sup>43</sup>。一方、同類小説と言える『轡回天綺談』の方は完結している。それは創作小説ではなく、翻訳小説であるという理由もあるが、主な理由は、やはり作品の思想が終始一貫して革命的ではなく、穩健思想であったからであろう<sup>44</sup>。前述のように、『洪水禍』、『新中国未来記』、『東欧女豪傑』には穩健思想もあるし、革命思想もある。そのため、中断した原因は、『新中国未来記』のように、恐らく思想の轉換にあると思われる。『新中国未来記』の未完理由を、夏曉虹は次のように指摘している。

梁啓超のアメリカの旅は、『新中国未来記』の筆を置く直接的原因である。その中で最も重要なのは、この旅が梁啓超に政治傾向を変えさせたことである。革命論はすでに放棄されたので、李去病という重要で、肯定的な人物を、どのようにとりかうことができたであろうか<sup>45</sup>。

革命派であれ、改良派であれ、専制反対、民権鼓吹という点では一致したが、しかし主宰者梁啓超は帰国後、思想の彷徨期から完全に改良思想に戻っていった。

したがって、ほぼ同時に中断したことから見れば、『新小説』の主宰者梁啓超のアメリカの旅が終わって、革命か改良かの彷徨期の思想が一変したことが原因となっている。そのため、フランス大革命思想は適合しなくなった。周達

の思想は先生に従って結局改良思想に戻っていったか、先生に規制されたか、と考えられる。未完の理由はこの二つのどちらかと考えられる。

先行研究を考え合わせると、『洪水禍』の未完理由は、『新中国未来記』『東欧女豪傑』と同じく、主に梁啓超の思想転換に原因があると考えられよう。

## 6. おわりに

以上は主に小説の構造、プロット、人物造型、思想などを通して、『洪水禍』における『経国美談』からの受容の最大可能性を述べた。周達著の『洪水禍』は、五回だけで中断したため、五回以後の具体的な内容がどう書かれるか不明である。しかし完成した五回分の内容及び全篇の梗概から見れば、『経国美談』の漢訳時に受けた啓発と模倣による作品だと考えられる。

歴史的な政治小説『洪水禍』は、看板「新小説」の一つとして創作された。「国民の脳に滲み込むのに最も効力があつた」<sup>46</sup>『経国美談』のような、ベストな歴史的な政治小説を創作しようと、周達と主宰者梁啓超によって決心を下され、創作されたのであろう。『洪水禍』に『経国美談』のような、歴史的な政治小説の役割を果たさせようとしたために、『洪水禍』を『新小説』誌の看板にした。しかも初めての「新小説」として、周達は、先生である梁啓超の主唱する「小説界革命」のために一臂の力をかそうとした。

この新演義体の創作に、それなりの難しさもあるが、しかし中国式の『経国美談』を創作するには、その唯一の方法、捷徑は『経国美談』を模倣することにあった。もちろん、『洪水禍』は忠実な模倣ではない。人物造型から見れば、『経国美談』の主人公は三人三様の性格を持つが、『洪水禍』は大きな歴史的な事件を背景とするため、全篇を貫く主人公が明らかではない。また、『経国美談』は深思熟考した作品に見えるが、しかし『洪水禍』は、功を焦った作品に見える。

しかし『経国美談』から借用した新しい小説形式と内容を「新小説」として取り入れたのは、旧小説から一歩抜け出ようとした嚆矢であると言える。さらに、中国近代小説の内部変革へのプロローグとなったとも言える。中国最初の近代的な小説雑誌『新小説』中の看板小説が、明治政治小説に影響されたことから見れば、清末政治小説に及ぼした明治政治小説の影響がいかに深かったかを知ることができる。

注

- 1 新小説報社「中国唯一之文学報<新小説>」『新民叢報』第14号、1902、8。ちなみに、中国研究者によれば、『新小説』の命名は、日本の1889年と1896年に創刊した同名雑誌を直接に借りたという。(陳平原『二十世紀中国小説史』第一卷、北京大学出版社 1989.12、p10、注①。夏曉虹『覺世与伝世：梁啓超的文学道路』上海人民出版社 1991、8、p 203。参照)なお、斎藤希史は、『新小説』の構成は「『新民叢報』ともども、お手本になったのは『太陽』など当時の日本の総合雑誌の誌面構成だとおもわれる」、と指摘している。(『近代文学観念形成期における梁啓超』『共同研究 梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房1999.11)。
- 2 「<新小説>第一号」『新民叢報』第20号。
- 3 梁啓超「新中国未来記緒言」『新小説』第1号、「『新小説』の刊行は、その発願は専ら此の篇のためである」、と指摘する。
- 4 阿英『晚清小説史』、飯島朗、中野美代子訳 平凡社 1979.2、p255。ただ、書き終わった『洪水禍』の回数、六回ではなく、五回である。また、『中国近代翻訳文学概論』(郭延礼、湖北教育出版社 1998.3)『中西文化碰撞与近代文学』(郭延礼、山東教育出版社 1999.4)と『経国美談』的翻訳者周達(孫継林、『清末小説から』第25号 1992.4)は、共に三回と誤っている。ちなみに、本稿『洪水禍』の底本は、『新小説』(上海書店復刻版、1980.12)第1、7号所載の『洪水禍』である。
- 5 樽本照雄『清末小説閑談』法律文化社1983.9、p4。
- 6 政治小説として見ているのは、知る限り、山田敬三の「『新小説』としての『歴史小説』——中国政治小説研究札記(上、下)」がある。山田論文は、「まだ、小説界革命の初心を逸脱せぬ変型政治小説であった」、という一言だけを指摘している。また孫継林の前掲論文は「周達は『経国美談』の翻訳後、また政治小説の創作を試みた」と、『洪水禍』のジャンルを指摘している。小説の政治性について、この二つの論文は詳しく論じていない。一方、欧陽健は「洪水禍」を改革小説として見ている。阿英は「講史與公案」の小説類に収めている。
- 7 樽本照雄編『新編増補清末民初小説目録』(齊魯書社 2002.4)によると、以下の所収がある。阿英『晚清小説目録』上海古典文学出版社1957.9、『中国通俗小説総目提要』江蘇省社会科学院明清小説研究中心編 中国文聯出版公司1991.9、『二十世紀中国文学大典(1897-1929)』陳鳴樹主編上海教育出版社1994.12、『中国近代文学大系』第12集第27卷「史料索引集」上海書店1996.3、『中国古代小説百科全書』中國大百科全書出版

社1993.4、『中国近代文学大辞典1840-1919』孫文光主編 黄山書社1995.12、『中国歴代小説辞典』第4巻：近代、王繼權主編 雲南人民出版社1993.3、『中国近代小説目録』王繼權、夏生元編百花洲文芸出版社1998.5、『中国古典小説大辞典』劉葉秋主編 河北人民出版社1998.7。

先行研究としては、知る限り、山田敬三の「新小説」としての「歴史小説」——中国政治小説研究札記（上、下）（神戸大学文学部「紀要」第11号、1984.3と第12号1985.2）がある。山田論文（上）は「雨塵子（周遠？）の作とされるが、むろん創作ではなく、何かの文献にもとづく翻案であろう」と指摘している。しかし本稿は、やはり『経国美談』のような創作小説だとする。他方、歐陽健の『晚清小説史』第1章第3節（浙江古籍出版社 1997.6）はかなり詳しく論じている。本稿は、これらの先行研究に多く負っている。

- 8 新小説報社「中国唯一之文学報<新小説>」『新民叢報』第14号、1902.8。
- 9 梁啓超と矢野龍溪の付き合いについて、次のような証言がある。「私は昔黄公度の『日本国志』を読んで、好きになった。それによって東瀛新国の状況をすべて分かると思ったが、都に入って日本公使矢野龍溪に会って、偶然それに言及した。龍溪はく『明史』によって今日の中国時局を言うことと異なる」と言った。私は佛然した。彼の説を尋ねた。龍溪はく黄書は明治十四年に完成したのである。我国は維新以来、十年間ごとの進歩は、前の百年間が及ばない。しかし二十年前の書は『明史』のようではないか」と言った。私は当時猶、彼の言を疑った。日本に来てから、所見が証となって、非常に信じている」（梁啓超「新民説・論進歩（一名論中国群治不進之原因）」『新民叢報』第10号、1902.6）なお、「矢野公使は昔私と一緒に北京にいた。彼の弊邦を親愛する心は、深く人を感動させ、称賛させた。」（「志賀重昂ト梁啓超トノ筆談」、『日本外交文書』第31巻第1冊、日本国際連合協会、1954.9、p704）。

この「弊邦を親愛する心」は、恐らく矢野龍溪が公使になってから「先生の胸中に一の遠大なる方策が描かれた」ことと無関係ではなかろう。「それは、教育の根本的改革を行ふことである。支那全土、四億の大衆を救ふの道は、これを措いては外にない。よしその効果は、直に目前に現れなくとも、支那民族を滅亡の淵より救ふのは、真に教育といふ一本の綱である。先生は、寧ろ公使の職を去って、清朝の顧問となり、自らその教育改革の衝に当ることが出来たならば、極めて愉快であらうとさへ思った。」（小栗又一編『龍溪矢野文雄君傳』春陽堂 1930.4、p293、294）。

- 10 当時の徳富蘆花、片山潜、高安月郊、北村透谷、巖本善治、国木田独歩、田山花袋たちに影響を与えた。柳田泉『政治小説研究』上巻 春秋社 1967.8、p 202、203参照。



ちなみに、本稿が用いた『経国美談』の底本は、小林智賀平校訂（岩波書店 1969.5-1969.7）のものである。本稿中の「コト」と記した原文は明治仮名づかいを用いていたために、筆者は引用時に「コト」とした。

- 11 梁啓超は、『経国美談』の漢訳前に、「また国民の脳に滲み込むのに最も効力があつたのは、『経国美談』、『佳人之奇遇』の両書が一番であつたという」と評価した（『飲米室自由書』『清議報』第26冊、1899.9）。漢訳後に、「政治小説『佳人之奇遇』『経国美談』等があり、稗官の異才によって、政界の大勢を書く。美人芳草に、別に意図がある。熱血の舌戦、幾多の關將、読む度に心を打たれ、移情させられる。千金國門に、誰もが同好を持つ」と、引き続き評価した（梁啓超「本館第一百冊祝辭並論報館之責任及本館之経歴」『清議報』第100冊、1901.12）。
- 12 中村忠行「晚清児童文学界の一側面」、「晚清における虚無党小説」（『天理大学学報』第18輯1955.10、第35輯1973.3）、沢田瑞穂「清末の小説」（『宋明清小説叢考』研文出版 1982.2）、『中西文化碰撞与近代文学』『中国近代翻译文学概論』（郭延礼、山東教育出版社 1999.4、湖北教育出版社 1998.3）、王中枕「叙述者の変貌——日本政治小説『経国美談』中訳本的叙述学分析」（『越界与想像：20世紀中国、日本文学比較研究論集』中国社会科学出版社、2001.8）、山田敬三「『清議報』誌上の漢訳『経国美談』—中国政治小説研究札記」（神戸大学「文化学年報」第3号1984.3）、山田敬三「『新小説』としての歴史小説——中国政治小説研究札記（上）」（p188）、孫継林の前掲論文は、同一人物と指摘している。
- 13 梁啓超は『佳人之奇遇』を漢訳し、漢訳序言としての「訳印政治小説序」の中で「かの米、英、独、仏、奥、伊、日本の政界が日に進歩しているのは、政治小説の功績が最も大きい」と、政治小説の功績を高く評価した。そして翻訳から創作へと転向していった。彼の『新中国未来記』は日本政治小説を模倣したのである。（中村忠行「『新中国未来記』攷説——中国文芸に及ぼせる日本文芸の影響の一例」、『天理大学学報』1巻1号1949.5、夏曉虹『覚世与传世——梁啓超的文学道路』、上海人民出版社1991.8、山田敬三「『新中国未来記』をめぐって——梁啓超における革命と変革の理論」『共同研究 梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房1999.11、拙稿「『新中国未来記』における「志士」と「佳人」——『経国美談』『佳人之奇遇』からの受容を中心に」『多元文化』第4号2004.3）など参照。
- 14 斎藤希史「<小説>の冒険——政治小説とその華訳をめぐって」『近代文学の起源』高田知波編 若草書房1999.7。
- 15 葉凱蒂「晚清政治小説的楔子」の中で、『老残游記』、『孽海花』、『痴人説夢記』、『新

舞台鴻雪記』を例として論じている。熊向東、周榕芳、王繼樞編『首屆中國近代文學國際學術研討會論文集』所収、百花洲文芸出版社1994.7。

- 16 『経国美談』における出典明示については、以下のように論じている。「正史・実事尊重の精神は、正史に拠り得ない〈架空〉の部分の功利性・勸懲性の拒否にも及ぶはずである。」(平岡敏夫「明治初期の政治と文学」『日本近代文学史研究』所収、有精堂 1969.6)、「龍溪が正史と史実を尊重するタテマエを序文や凡例でうたいあげたのは、いうまでもなく明治初年の実学尊重の気風への配慮であって、もっと限定して言えば、龍溪の師である福沢の実学主義へのアポロジがこの序文にこめられているのではないかと考える。」(前田愛注釈『明治政治小説集』角川書店 1974.3、p450)、「こうした筆法は、江戸の読本にもすでに存在した技法だったのであり、したがって読者との約束としては、一応の出典表示にすぎなかったはずであった。」(飛鳥井雅道『日本近代精神史の研究』京都大学学術出版会 2002.9、p302)。
- 17 『洪水禍』の付記について、山田敬三の前注6論文は、次のように論じている。「これはく本篇ノ正史大要ヲ卷末ニ掲ケ読者ヲシテ此書ノ架空ナラサルヲ知ラシム」と称した、矢野龍溪の『経国美談』の形式を襲ったものと考えられる」。原作『経国美談』の「正史大要」はただ前篇の最後だけに「沉紫生漢訳」と署名している、漢文体の「正史摘節」が付けられている。しかし「洪水禍」は毎回到「付記」として付けられており、史実をいちいち明示している。これから分かるように、周遊はやはり原作『経国美談』中の「引用書目」、「凡例」及び作中のいちいち出典明示の形式を模倣した可能性が最も高いと思う。
- 18 同注1。
- 19 「觚庵漫筆」『小説林』第11期、1908.6。
- 20 柳田泉『政治小説研究』上巻 春秋社 1967.8、p186。
- 21 柳田泉同上注p199。
- 22 柳田泉同上注。
- 23 柳田泉は、次のように指摘している。「例えば威波能のどこかに龍溪の崇拝したという諸葛亮や韓魏公の面影があったり、瑪留に『水滸伝』の黒旋風李逵の風が見えたりする。」(同上注p192)。前田愛は次のように指摘している。「龍溪はペロピダス、エパミノンダス、メロンの三人の英雄を描くにあたって、『西遊記』の孫悟空・猪八戒・沙悟淨、『三国志』の劉備・関羽・張飛の組み合わせを参考にしたとおもわれる。正史ではペロピダス、エパミノンダスに比べて影のうすい存在でしかないメロンの人間像を敷衍して、滑稽味を帯びた英雄に造型したのは、おそらくこの中国小説特有の三分

法による人物造型の手法を学んだものであろう。悟空の靈性が八戒の欲望とのコントラストにおいていっそう鮮明に浮きぼりにされるように、メロンの直情径行とそれに伴う失敗は、ペロピダスの冷静な知力をきわ立たせるための技法といえる。」(前田愛注釈『明治政治小説集』角川書店 1974. 3、p456)。

- 24 同20注柳田泉p190。
- 25 本間久雄『明治文学史』上巻東京堂1938. 11、p 249。
- 26 柳田泉によると、漢文学の教養、支那小説の愛読から学んだところの、照応・伏線・波瀾・抑揚などという語辞で表わされている記叙のテクニクが、類を尽くして用いられるとする。(同20注、p191)。
- 27 畑有三、山田有策編『日本文芸史：表現の流れ』第五巻、近代Ⅰ 河出書房新社1991. 1、p77。
- 28 『新民叢報』の第14号1902. 8。
- 29 『新民叢報』第20号1902. 11。
- 30 梁啓超「論小説と群治之関係」『新小説』第1号1902. 11。
- 31 「<新小説>第一号」の中で、『新小説』誌には「自著作が十分の七を占め、訳作が十分の三を占めている」、と示している。
- 32 『新民叢報』第20号。
- 33 猪野謙二「政治・社会小説の流れ」『近代日本文学史研究』未来社1954. 1。
- 34 欧陽健『晚清小説史』(p36)の中で、「初めて」、と指摘しているが、実は天賦人權の観念の出現は『洪水禍』が初めてではない。『新小説』誌の中では、「東欧女豪傑」(第一回、『新小説』第1号1902. 11)、『新中國未來記』(第三回、『新小説』第2号、1902. 12)、『回天綺談』(第12回『新小説』第四号、1903. 6)、『洪水禍』(第四回、『新小説』第7号、1903. 9)の順で現れている。
- 35 その他、『殖民偉績』第一回(『新民叢報』第20号1902. 10)にも、『美人手』第一回(『新民叢報』第36号1903. 8)にも、『女子愛国小説・情天債』(『女子世界』第1—4期<1904. 1. 17—4. 16>)にも、『孽海花』第一回(1905年小説林社)のまくらにも、「天賦の自由」、「自由を与えよ、しからずんば死を与えよ」がある。この思想的潮流は、恐らく明治日本からの影響を受けたと考えられよう。
- 36 柳田泉『政治小説研究』下巻1968. 12、p73参照。
- 37 鄒振環『影響中国近代社会的一百種訳作』(中国对外翻訳出版公司、1996. 1、p136)によると、1898年に上海同文書局によって、中江兆民の『民約訳解』第一巻が復刻された。なお、1900年に当時の留学楊廷棟が『民約論』を訳し、『訳書匯編』に連載した

という。『訳書匯編』は東京で刊行された雑誌である。もう一つ横浜で刊行された雑誌『開智録』にも『民約論』が訳載されたという。(『辛亥革命前十年間時論選集』第一卷下冊、生活・読書・新知三聯書店、1962.9、p966参照)。当時に、ルソーの思想は新事物として広く紹介されたことが分かる。

- 38 『清議報』第30冊、1899.10。
- 39 即ち、『清議報』第98、99、100冊（1901.11、12）に掲載している「盧梭学案」、『新民叢報』第11、12号（1902.7）に掲載している「民約論鑿子盧梭之学説」。
- 40 中村忠行「晚清における虚無党小説」『天理大学学报』第85輯1973.3。
- 41 山田敬三「新小説」としての「歴史小説」——中国政治小説研究札記（下）」
- 42 欧陽健『晚清小説史』同7注。
- 43 『洪水禍』、『新中国未来記』はともに『新小説』第7号（1903.9）に中断した。『東欧女豪傑』は『新小説』第5号（1903.7）に中断した。
- 44 拙稿「清末『新小説』誌における『繡回天綺談』——明治政治小説『繡回天綺談』との比較」『多元文化』第5号、2005.3予定。
- 45 夏曉虹『覚世与伝世：梁啓超的文学道路』上海人民出版社 1991.8、p 72。
- 46 梁啓超「伝播文明三利器」『清議報』第26冊1899.9。